





山尾悠子 作品集成

国書刊行会

やまお ゆうこ さくひんしゆうせい
山尾悠子作品集成

二〇〇〇年六月一五如初版第一刷印刷

二〇〇〇年六月二五如初版第一刷発行

著 者 山尾悠子

発行者 佐藤今朝夫

発行所 株式会社国書刊行会

東京都板橋区志村一―三―一五

電話〇三(五九七〇)七四二一 FAX〇三(五九七〇)七四二七

印刷 ㈱キャップス・株式会社エーヴィスシステムズ

製 本 大口製本印刷株式会社

装 丁 柳川貴代

ISBN4-336-04256-X

山尾悠子作品集成*目次

夢の棲む街

7

夢の棲む街……………9

月蝕……………45

ムーンゲイト……………72

墮天使……………115

遠近法……………131

シメールの領地……………153

ファンタジア領……………182

耶路庭国異聞

235

耶路庭国異聞……………237

街の人名簿……………264

巨人……………309

蝕……………334

スターストーン……………359

黒金……………363

童話・支那風小夜曲集……………377

透明族に関するエスキス……………400

私はその男にハンザ街で出会った……………425

遠近法・補遺……………434

破壊王

445

パラス・アテネ……………447

火焰圖……………501

夜半樂……………563

蘭〔饗宴〕抄……………618

掌篇集・綴れ織……………627

支那の禽……………629

秋宵……………632

菊……………637

眠れる美女……………642

傳説……………645

月齡……………651

蟬丸……………658

赤い糸・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 667

塔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 671

天使論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 676

ゴレム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 679

解題（石堂藍）・・・・・・・・・・・・・・ 727

山尾悠子著作年表・・・・・・・・・・・・・・ 758

後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 760

夢の棲む街

夢の棲む街

1 〈夢喰い虫〉のバクが登場する

街の噂の運び屋の一人、〈夢喰い虫〉のバクは、その日も徒労のまま劇場の奈落から這い出し、その途中ひどい立ち眩^{くら}みを起こした。

劇場が一切の活動を停止して以来、すでに数箇月たつ。他の仲間たちはとうに劇場に見切りをつけて別の河岸へ移っていき、ぶ厚く埃の積もった円形劇場の通路に足跡をつけるのは、今ではバクただ一人になっていた。複雑な浮き彫りに覆われた漆黒の硝子^{ガラス}製円天井には、あちこちに灯とりの小さな穴が透かし彫りのように穿たれ、その無数の隙間から射しこむ薄い光線はドームのはるかな高みでジグザグに交差し、劇場内の空間に豊かな広がりを与えている。しかし最近はその光線も妙に埃っぽくなり、今日も地下の楽屋には数人の雑役夫が眠りこけているだけだった。そして何一つ新しい情報を得られないまま無人の客席の長い階段をバクは一人で登ってゆき、その途中で貧血を起こしたのである。——丸い臍を支えきれずに立ちどまると、階段状のシートや円柱はバクの目の前で急速に色を失って白黒^{モノクローム}になり、四方から黒い霞が押しよせてくる視界の中央に白い斑のようなものがちらついていた。耳もとでザワザワと血の引いていく音が聞こえて、バクは少し気が遠くなくなりかけたが、そのまま臍が重いのを我慢してゆっくり段階を登り、西向きの正面玄関の扉をあけると外は夕暮れ時だった。

街は、浅い漏斗型しやうぶつをしている。

その漏斗の底に当たる劇場前の広場に立ったバクは、夕暮れ時の街、まだ寝静まっっていて人影ひとつ見えない街を、すり鉢の内側を底から見上げるようにしてひと目で見渡すことができた。劇場を中心として海星ヒトデの脚のように放射状に走る無数の街路が、ゆるい傾斜で四方へ徐々にせり上がってゆき、漏斗の縁に当たる部分で唐突に跡切れている。街は、そこで終わりだ。そしてその丸い地下線の上では、魚眼レンズで集めた映像のような半球型の空の、東半分だけが暮れかけている。この時刻、街の中で目覚めて動いているのは「夢喰い虫」たちだけだが、バクを除いた他の仲間たちは、今頃は一匹残らず、集めてきた噂話を携えて街の漏斗の縁に集まっている筈だった。

「夢喰い虫」の仕事は、街の噂を収集しそれを街中に広めることである。街のあらゆる場所に散らばって、一日かかって自分の河岸の噂を集めた「夢喰い虫」たちは、日暮れ時になるとそれぞれ街の底に背を向けて、思い思いの方角に向かって石畳の斜面を登っていく。ドングリの実によく似た彼らの姿は、人気のない灰色の街路を影から影へとつたい歩きながらひそひそと登っていき、最後に街の最上部である漏斗の縁に着く。街の縁の円周上に大きな円陣をつくった「夢喰い虫」たちは、それぞれ街の底を見おろす姿勢で口の周囲に両掌をあてがい、やがて吹いてくる夕暮れの微風を背に受けて、ひそやかに街の噂をささやき始める。

……最初のうち、街の中に変化はほとんど感じられない。陽が斜めに射した人のいない小広場では罫はわかれた泉水盤が森閑と埃をかぶり、街角の時計台では古びた針が音もなく時を刻み続け、錠戸を閉ざした家並は内に人の気配を潜ませたまま、森と静まりかえっている。そのうちにふと、その街角のひとつに主のないささやき声がひっそりと浮遊する。空中の声はしばらくの間蝙蝠のようにひらひらとあたりを漂っているが、いつの間にかその声が分裂して二つに増え、三つに増え、奇妙な抑揚のある口調でしきりにひそひそと街の噂を喋りたて始める。いつかそれは街路のあちこちに漂ってゆき、漂いながら徐々に流れ始める。声は次第次第にその数を増しながら街の噂を街路の傾斜に乗せて吹き流し、あらゆる舗道や路地を伝って水の流れのように街の斜面

を滑り落ちていく。街の住人たちは、それぞれの寢床の中で、眠りながら薄く目をあけて、それらの声の語る噂話を聞く。バクはこの〈夢喰い虫〉の儀式にもう数箇月間も参加できずにいたが、この街において、儀式に加われない〈夢喰い虫〉ほど中途半端な存在はなかった。務めを果たせない〈夢喰い虫〉はすでに〈夢喰い虫〉ではなく、〈夢喰い虫〉ではない何者かになってしまふのだからかと思裂だらけの石畳に立ってぼんやり考えていると、ふと斜面のずつと上のほうで遠い声が聞こえたような気がして、バクははっと耳を澄ました。

劇場を中心とした円形の広場の四方には、市街にむかつて放射状にのびる街路の口が、無数に開いている。その口の向こうに、四方からひしひしと押し包んでくるものの気配があった。海の沖から津波が押し寄せてくるように、街並の向こうから遠くザワザワと軍隊蟻の行進のような音をたてて広場に忍び寄ってくるのは、確かにあの〈夢喰い虫〉の声だったので、バクはひどくうろたえた。昨夜までは、バクは日が暮れてしまふまでしつこく劇場の中をうろつくのが日課だったため今まで気がつかなかったのだが、夕方漏斗型の街の斜面をなだれ落ちてくる〈夢喰い虫〉たちの無数の声は、必然的に最後にはこの街の底へ四方から流れ込んでくる。その頃になると噂を囁く声は無数に重複し、それらが漏斗の底の狭い空間にいちどきに堆積し凝縮されるため、その音量はほとんど破壊的であるとさえ言われ、広場の石畳の荒廃がひときわ激しいのは声の群に侵蝕されたためだという噂さえある。一度、ひどい不眠症にかかった劇場の老雑役夫が、街の不文律を破って日が暮れないうちに劇場前広場に出ていったことがあった。夜になって人々に発見された時、老人は石畳の真中で白眼をむき、両手で耳を覆って悶え苦しんでいた。駆け寄ってくる人々の声が耳に入るなり、老人は絶え入るような悲鳴をあげ、声が、声がという言葉を最後に舌を咬み泡を吹いて悶死したという。

その間にも見るみるうちに声の群は四方から輪を押し締め、数万の羽虫が唸るような音の中に、切れぎれに言葉の断片が聞きとれるほど近く迫ってきた。流れてくる空気の中に無数の細かい震動が感じられ始め、バクはあわてて自分のねぐらめがけて斜面のひとつを駆け出した。

2 〈薔薇色の脚〉の逃走と帰還及びその変身

バクが最後に噂話を仕入れることができたのは、劇場の最後の公演となった〈薔薇色の脚〉の舞踏公演のあった日のことである。

夜の公演が始まる直前、闇に乗じて集団失踪した踊り子たち——その彼女たちが、ついに全員捕獲され連れ戻されたという情報をつかんでバクが劇場へ向かったのは、その日の真夜中近い頃だった。街の構造を模して設計されたという劇場の、円天井のあるオペラ劇場風大ホールの中央、すり鉢状の客席に取り囲まれて陥没しているように見える円形舞台まで、長い階段を幾つも下り、舞台中央の小さな上げ蓋を開くと、そこが地下の楽屋へ通じる入口になっている。この劇場では、控室や楽屋など付属的な設備はすべて地下に収納され、地上に現われているのは大ホールだけだった。ランプの点った狭い竖穴を下って納骨堂めいた地下の楽屋へ降りていくと、そこでは目を血走らせ一様にアマガエルそっくりの風貌をした〈演出家〉たちが、興奮して何か大声で議論していた。

今こそ我々が踊る時だ、と一人が叫んだ。

踊り子たちの〈脚〉はなくとも、我々のパン^だ胼^このある手や運動不足でむくんだ脚を、コトバは覆い隠してくれる筈だ！

口々に賛同の声をあげて拍手喝采している演出家たちの横を擦り抜け、バクは雑役夫の一人に踊り子たちの居場所を尋ねた。老人は奥の扉を指さした。劇場前の広場には、真夜中からの公演を見ようと集まってきた群衆がすでにひしめきあって開門を待っているというのに、これでは開演はおぼつかないようだと思いながら扉をあけて覗き込んでみると、踊り子たちは暗い床の上に鮎^{マダロ}のように折り重なって転がっていた。一瞬、〈脚の群〉という言葉がバクの頭に浮かんだのは無理のないことで、踊り子たちはまさしく骨盤と二本の脚だけで

きているような体型をしているのである。その姿はバクにとって見慣れたものだった筈だが、それでも、見事に発達して脂ぎった下半身の、常人の二倍はある骨盤の上に、栄養不良のため異様に痩せて縮んだ上半身が乗っている畸形的な体軀は、見る者にある圧倒的な意志——この人工的畸型を造り出した者の偏執的な意志を、感じさせた。そしてその骨が曲がった畸型の上半身は今、一樣に目を閉じ口を薄くあけた顔（幼児の顔ほどの大きさしかない、痩せしなびた大人の女の顔）を投げ出して死んだように横たわっているのだった。

劇場の踊り子たちは、〈薔薇色の脚〉と呼ばれている。それは全く見事な脚で、太めの腰から伸びている適度に肉のついた腿とふくらはぎ、よく締まった足首、そしてやや華奢な踵から爪先まですっかり薔薇色の絹のタイツで覆われているところからこの名がつけられている。その下半身とは対照的に上半身は全く無視され、筋肉は栄養失調と運動不足で萎えたように縮み、さらに骨格までもがひとまわり大きさが縮んでいるため、飢餓状態の子供の跡ほどの大きさに干からびていた。手入れをされないため皮膚は垢じみ髪は纏れたままで、知覚がまだ残っているのかどうか、踊り子たちはいつでも一言も言葉を発しなかった。彼女たちをこういう状態の〈薔薇色の脚〉にしたてあげたのは、劇場の演出家たちである。

彼女たちの前身は、いずれも街の乞食や浮浪者または街娼であるという。演出家たちが時おり街に出て彼女たちを狩り集めてくるのだが、そのおおむねは畸型で、背中に瘤のある者や舌の長い者、毛髪のない者（眉毛も睫毛も無いので、その顔は卵そっくりに見える）、また、鳥の巣のように絡みあつた髪の毛の隙間から両眼だけを覗かせた小人女もいた。この畸型女たちを〈薔薇色の脚〉に創りあげる方法は演出家たちの秘密とされているが、街の噂によればこれはかれらが彼女たちの脚にコトバを吹き込むことによつてなされるのだという。——黒びろろなどの緞帳が幾重にも垂れこめた舞台裏で、毎夜演出家たちは踊り子の足の裏に唇を押しあてて、薔薇色のコトバを吹き込む。ひとつのコトバが吹き込まれるたびに脚はその艶を増していくが、下半身が脂ののつた魚の皮膚のような輝きを持つにつれて畸型の上半身は徐々に生氣を失つてゆき、舞台の上で猛々しい乱舞をする時も、その上半身はただ脚の動きに身をまかせて力なく振り回されるだけか、または異様に小さくなった

コビトの手で巨大な腹にしがみついているかのどちらかだった。

その踊り子たちが脱走したことが知れるや否や、劇場の地下から四方に張り巡らされた通信線を伝令が走り、漏斗型の街の斜面を螺旋を描いて上昇していった。すぐに、ただけしい〈脚〉の群が高笑いを残して路地の向こうを駆け抜けていくのを目撃したという情報が入り、ほどなく全員が捕獲され連れもどされたわけだが、一人の踊り子は脱走の理由を告白して、こう言った。（薔薇色の脚）が人語を喋るということがすでに、演出家たちにとっては驚きだった。（コトバがひとつ吹き込まれるたびに、私たちの脚は重くなる。私たちとて踊り子の端くれ、コトバのない世界の縁を、爪先立って踊ってみたい気があったのだ、と。それを聞いた演出家たちは怒り狂い、踊り子たちの脚からコトバを抜きとってしまった（雑役夫たちの言うことによれば、踊り子の足の裏に唇を押しあててコトバを吸い取ったのだそうだ）が、そのとたんに脚たちは力を失い、死んだように動かなくなってしまったのだという。

その時、頭上に轟きわたる足音が反響し、それと同時に、開門して観客を中に入れたという報告が入った。踊り子失踪事件が前宣伝になったのか大ホールは大入満員で、すり鉢状の階段座席から円天井に近い天井機敷までいっぱいになっているという。逆上しきった演出家たちは、引きとめる間もなく堅穴の階段を駆け登っていつてしまい、同時に頭上の蛇の羽音のようなざわめきが静まって、演出家たちが何か演説しているらしい声が響き始めた。本当に踊るつもりなのかどうかはともかく、少なくとも時間稼ぎにはなるだろうと、バクは踊り子たちの所へ駆け戻り、扉を引きあげた。

薄暗い部屋の中に、〈脚〉の群は列をなして森と立ち並んでいた。廊下の光がわずかに射し込んでその足元をぼんやり照らし、上の方はひどく暗くてほとんど闇に溶け込んでいるように見えたが、やがて目が慣れるにつれて徐々にその輪郭が現われてきた。扉の取っ手を握ったまま、バクはぼかんと口をあけてその姿を見あげた。バクの目の前には薔薇色の膝頭が位置していたが、そこからさらに高みに向かって緩やかな曲線が徐々に広がり、その線は天井に近いあたりの暗闇に位置する生々しい巨大な腰に続いている。前のほぼ二倍の大きさ